| | |
|---|---|
| 氏名（本籍） | 後藤恭代（千葉県） |
| 学位の種類 | 学術博士 |
| 学位記番号 | 博美第 23 号 |
| 学位授与年月日 | 平成3年3月25日 |
| 学位論文等題約 | 〈論文〉「モアレ法等による体表のレリーフの美術解剖学的研究—A. RODIN 作『青銅時代』の体幹部を中心として—」 |

論文等審査委員

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| （主　査） | 東京芸術大学 | 教　授 | （美術学部） | 高橋　彬 |
| （副　査） | 〃 | 〃 | （　〃　） | 小町谷朝生 |
| （　〃　） | 〃 | 〃 | （　〃　） | 杉下龍一郎 |
| （　〃　） | 〃 | 〃 | （　〃　） | 稲次敏郎 |
| （　〃　） | 東京大学 | 〃 | | 養老孟司 |
| （　〃　） | 文化女子大学大学院 | 〃 | | 中尾喜保 |

（論文内容の要旨）

本論文はロダン（Auguste Rodin）の青銅時代を対象に、彫刻像の量感表現とそのリアリティについて、モアレ法等を用いて美術解剖学的立場から研究したものである。

『青銅時代』は発表当初、生きた人間から直接型を採ったと非難された程リアリスティックな彫刻像として知られており、その美的価値、ロダンの作品の中で占める位置、非難された背景、認められていく経過等については多くの研究がなされている。

しかし、その解剖学的正確さや造形表現のために施された形態の変形について、人体と比較分析した研究は殆ど見られない。

筆者は、『青銅時代』の優れた立体的特徴を数量的に客観化して示し、また、モアレ法によって『青銅時代』と『青銅時代』のポーズを再現した被検者の形態を比較するとともに、独自の指標を用いて捻じれやムーブマンを分析し、『青銅時代』に見られるリアリティ、造形表

現のための形態の変形とその効果等について考察している。

論文はⅠ.緒言、Ⅱ.研究方法、Ⅲ.結果と考察、Ⅳ.結論より構成されているが、

Ⅰ. 緒言では、ロダンの作品の中で『青銅時代』がどのような位置を占めるかについて述べ、何故『青銅時代』を研究対象として選んだかについて説明している。またロダンが作品を製作する際に、自ら行ったとする『奥行き』(profondeur)、『増盛』(amplification)、『ムーヴマン』(mouvement) 等の用語に触れ、これらの記載がどのように作品に表現されているかについて追求するとともにロダン独自の量感表現とリアリティについて解析することを研究目標とすると述べている。

Ⅱ. 研究方法では、本研究で用いた　1.マルチン式計測法、2.計測項目と指数、3.モアレ法、4.モアレ写真撮影法、5.デジタイザーを用いたコンピューター解析法について、それぞれ詳細に記述している。

また、Ⅲ.結果と考察では　1.マルチン式計測法によって得られた計測値と比の値について検討を加えるとともに、2.モアレ法で得られたデータをもとに、1)『青銅時代』のポーズについて、2)体表のレリーフとモアレ縞について、3)各指標の位置と各指標間の距離および各指標点を結ぶ直線と前頭面のなす角度について、4)横断面形状の比較、5)縦断面形状の比較、6)『青銅時代』の全横断面形状における前および後正中線の座標値と前および後方への弯曲度、7)『青銅時代』の全横断面面積と全横断面の捻じれ角度等について考察を行っている。

その結果、Ⅳ.結果では『青銅時代』には次の様な特徴が認められたとしている。

1)　肩幅が小さく華奢であり、体幹中部および下部の幅径は比較に用いた被験者とほとんど同一であるが、上半身を支える転子間幅は大きく表現されていて、像を見上げた際の遠近感を強調し、伸びやかな印象を与えていると考えられる。

2)　胸囲は比較に用いた被験者とほぼ同一であるのに対し、胸部矢状径が大きく、胸部全体が前方へ張り出していて、胸をふくらませているようにみせる効果を高めている。

3)　左肩峰部から左乳頭点にかけての部位が、生体でとりうるポーズに較べて上方に造形され、上方への伸び上がるようなムーヴマンを表現している。

4)　体表のレリーフは、前面、後面ともに細部にいたるまで正確に造形され、特に生体でみられる右腕を挙げる動作をした時の筋の状態が、精細に造形されている。

5)　胸部はやや左の方向を向いているのに対し、腰部は右の方向を向いていて、体幹に捻じれがあり、しかも生体より捻じれを大きく表現することによって、体幹により強い螺旋状のムーヴマンを生み出している。さらに，この螺旋状のムーヴマンは、上右を向いている顔面、左を向いている大腿部、右を向いている下腿部によって、全身に広がっている。

6)　モアレ画像の分析によって、前面においては胸部、上腹部、後面においては殿部がそれぞれ矢状方向へ、比較に用いた被験者よりも大きく突出し、また殿部全体の突出が被験者より上方に位置している。このような造形表現によって、像の矢状断面の形に抑揚をつけ、体幹上部に上前方へのムーヴマン、体幹下部に後下方へのムーヴマンを強調している。

特に、2)3)5)6)は、ロダンが造形表現のために自らの考えに基づいて行った形態の変形であり、5)では、体幹の捻じれを強調して手前から奥に視線を導くことによって、像の『奥行き』を強調しており、6)では、体幹の特定の部位を突出させることによって、像の矢状方向への『増盛』を行っている。これらの変形は、モデルには存在し得ないが、彫刻像に盛り込まれることによって、自然に見られる形態をより動的に感じさせ、『青銅時代』を生命力あふれる青年像に造りあげていることが明らかになった。